

うるかについては、必ずしも明確ではなく、概してその必要性を説くにとどまるきらいがある。

氏は、かねてから専門家として市民と交わりつつ、ユニーク、且つ精力的な活動をつづけていて、この問題に関して具体的研究をしている。

また、氏がまとめた著書のなかでも氏は、欧米のすぐれた住環境の背後には市民が自らの住まいと町を育て上げる「住文化」の伝統があり、その中で「絵本」が大きな役割をはたしているのではないかという観点から、氏が自ら収集した欧米の各種絵本の内容を詳細に分析しながら、住み手が身のまわりの環境に関心をもつことの大切さと楽しさを強くアピールしている。

氏の研究の大きな特徴は、その着眼点のユニークさであり、しかもその未来への可能性の大きさである。すなわち絵本という新しいメディアに着目しまとめあげた著書「こんな家に住みたい—絵本にみる住宅と都市」をとってみても、市民の都市教育・住教育という新しい研究分野と実践分野の可能性を示唆する。断鮮な問題提起をしており、また住まいと町づくりに関する、わが国独自の創作絵本への取り組みを促すうえで、大きな社会的インパクトとなるものと思われる。

以上から氏の研究は、きわめて独創的・啓蒙的であり、わが国都市計画の学問的成果と社会的基盤の進歩発展に資するところ大であると判断されるので石川奨励賞にふさわしいと考える。

日本都市計画学会論文賞

「都市設計に関する一連の研究」

田 村 明

■ 略 歴

昭和25～29年 東京大学工学部建築学科、同法学部法律学科、同法学部第3類（政治コース）卒業

昭和25～26年 運輸省大臣官房観光部計画課

昭和29～37年 日本生命本店不動産課次長

昭和38～43年 環境開発センター計画部長

昭和43～56年 横浜市企画調整室企画調整部長、同企画調整局長、同技監

昭和56年～現在 法政大学法学部教授（都市政策）

その他 東京大学工学部（都市工学）、早稲田大学理工学部（都市計画）講師

工学博士（東京大学）技術士（都市及び地方計画）不動産鑑定士

日本建築学会業績賞（横浜市企画調整局代表として）（52年度）、国際交通安全学会著作部門賞（58年度）受賞

■ 日本都市計画学会論文賞を受賞して

私は、都市計画においては実践的なプランナーがプロフェッションとして確立する必要があると考え、極力その実践をしてきたつもりである。そうしたプランナーとしての実践の場を通じて、折にふれ都市計画の理論、手法あるいは実践の記録などを発表してきたが、それらの一連の研究に対して論文賞を与えられたことについて、深く感謝申し上げたい。

とくに、私の場合は、研究者としてよりも、都市計画の実践を行なうプランナーの道を歩んできた者だけに、



（代理 真生子夫人）

ひとしお感慨深いものがある。実践的プランナーは、都市のあるべき姿や方向を示すだけでなく、常に現実にかかわり、これをいくらかでも望ましい方向に動かしてゆく仕事であり、流動し変転する現実に対して、小さな努力も怠ることができない。そのため論文として発表できるのは、実践のなかでも相当まとまった状況に限られる。生々しい現実に触れているという利点はあるが、研究者のような発表の機会が少ない。しかし、私にとっては横浜市という具体的実践の場を与えられ、そのなかで得たものを多少とも発表する機会にめぐまれた。その間、お世話になった方々はあまりにも多く、ここで一々申上げることができないが、それらの多くの方々の永年のお教や友誼に対し今回の受賞の機会に改めて厚くお礼を申上げたい。

○都市計画における理論と現実

私が都市計画の実践を通じて、いつも痛切に感じていたことは、そのすぐれた思想、理念、理論などと、現実に行なわれている都市づくりとの間に、あまりにも大きな乖離が見られることである。せっかくの都市のあるべき思想や理論は現実には働きかける力が弱く、実際には、その状況のなかの政治的、経済的、社会的、制度的なものや力や仕組みが優先し、あまりにも現実的な方向に流されている。

実践的なプランナーとは、この乖離を直視し、その間をいかに埋め、つなぎ、その環境のなかで固定的な理論にとどまらず新たな理論が実践的手法を生みだし、他方においては、現実のなかに沈滞している状態を、いかにして理念による方向をもったものに近づけてゆく者である。都市計画における研究者と、都市づくりの現場とをいかに縮めてゆくかが、その大きな役割であると考えている。

もちろん、実践の場とは直接かかわりない理論や研究は、それなりに必要であろうし、それが、どこかで現実にも影響を与えてゆくものではあろう。だが、都市計画は、純粋理論の学ではなく、すぐれて実践的な応用の学問であり、現実への実用性をもつであろう。それには、工学的方法にとどまらず、極めて総合的学際的な理論や手法が必要になる。そうした新しい総合的実践学としての都市計画が今後ますます必要になってくるものと考えられる。これには、研究者のだれにも、この方面への関心とかかわりが強化されることが望まれるが、実践者のなかからも、現場から新しい理論と手法をもった実践的プランナーが登場することが必要であると考えられる。それらの協力によって、理論と現実の乖離を埋め、現実に作用できる理論と手法が生れてくるものと考えられる。都市計画は、理論と現実のたえざるフィードバックによって前進するものであり、それが実践の場としての

都市計画であろう。

私自身このようななかで、従来の都市総合計画の現実への力や総合性の弱さを感じて、プロジェクト方式、都市計画の総合手段としての企画調整組織、それにとまなう総合手法を新たな理論と実践として行なってきた。

また、都市計画の土地利用や開発にかかわり、在来制度の硬直性や総合性の弱さを現場で痛感し、土地利用や開発にとまなう要綱行政の創出、法律や条例の活用などを行ない、また、緑、歴史的環境、日照公害などの環境面もこれに加えてきた。

さらに、具体的都市づくり手法としての、市街地環境設計制度や、都市デザイン手法を導入し、また、市民参加の具体的な方法と実践を試みてきた。

これらはまだまだ不十分なものが多いが、現実の中で新たな理論と手法をくみだして、実践のなかでそれを強化してきたものである。

○都市プランナーと研究者

すでにのべたように、都市プランナーは、現実に当たりつつ、現実に流されるのではなく、将来生ずる問題を見とおし、あるべき都市の姿に近づけてゆく実務者である。問題を予測する洞察力と、将来への理念をもたなくてはならない。そのためには、都市プランナーはたんなる実務家ではなく、都市や都市計画についての絶えざる研究者でなければならないことは当然である。

都市プランナーは少なくとも次の3つの意味での研究者であることが必要になる。

第1には、必要なプランニングを行なうための実務的な目的で、都市の現状や将来を分析し予測してゆくのであり、また、計画を行なうためのさまざまなケーススタディや手法の研究も怠ることはできない。これを深く行なうれば、解析や現状分析、予測などを専門にした専門プランナーも生れてくるだろうし、そうでなくても最低限、基礎的なレベルでの研究者であることは欠かせない。

第2には、「理論と現実の乖離」でのべたとおり、理念と現実を埋める理論や手法を生みだす研究者でなければならない。乖離の原因はさまざまである。現実の政治的、経済的、社会的な認識や見とおしが甘いこともあるし、理念や理論そのものが、日本の特定の都市の条件に合わないということもあろう。そうしたなかで、状況を正しくつかみとり、状況のもつ相互のからみあいを見通し、また、都市の現状をおさえつつ、これを望ましいものにしてゆく、新たな理念や手法が研究されなければならない。

第3には、実践的プランナーであっても、四六時中現実のなかに埋没したままでは、かえって視野が狭くなり、現実にとらわれすぎて、よりよい解決につながらな

いこともある。現実の生々しい問題に当って悪戦苦闘しているときにこそ、かえって客観的、大局的な都市研究も必要だし、それが良い研究を生みだし、間接的に現実にも意味をもつことがあるのである。私自身は、そうした悪戦苦闘の間に、「都市と人類」「計画とは何か」「市民の意味」などという基本的な問題を考え、論文にしたこともある。それは実践のなかでも、かえってよい結果をもたらした。主観にとらわれすぎない客観的な研究者の立場をどこかで確保していることも必要なのである。

第二と第三の研究の意味は、一見相矛盾するようにも見えるが、そうした多面的な視点をもったうえで、現実にかかわることがプランナーに要求される。実践プランナーはいっそう広いいみの研究者である必要がある。

○今後の研究の課題

私の都市への関心はきわめて多方面にわたっているが、それを、現実の都市にどう総合的に用いられるかが最大の関心である。よりよき都市を計画し、つくってゆくためには、これまでに引続き、なお次のような点の研究を行なってゆきたいと考えている。

●都市計画の主体に関する研究

都市づくりは、現実には多様な目的をもつ多数の主体であるが、この構成主体を生かしながら、いかに総合的な計画の主体をつくるかが最も基本的課題である。このなかで「市民」「自治体」「コミュニティ」「中央と地方」「地域と企業」などが対象になる。

●都市計画における具体的総合化の方法に関する研究

主体性は都市計画の基礎的外部条件だが、その主体性の中味も実際は複雑である。都市計画は未来性と総合性を中心とする方法であり、具体的な総合性を実現する手法の研究が必要である。このために「計画組織」「計画のシステム」「利害調整」「市民参加」「専門家の意味と役割」といった点が対象になる。

●都市計画における土地に関する研究

都市計画の物的基礎は土地利用である。都市の共有的環境財として土地がどう生かされてゆくか、利用に当ってはどのようなルールが必要かが課題になる。「地価の意味」「開発利益とその帰属」「土地利用と空間構成」「緑とオープンスペース」「産業と都市」などが研究対象になる。

●都市の空間的構成、とくに都市デザインの研究

都市は具体的な姿をもつものであり、その空間的構成のなかに、機能性だけでなく、より人間的な要素も組み入れられなければならない。このため「都市の個性」「歴史的環境」「美しさ、うるおい」「魅力」「都市デザイン」が対象になる。

●広域的都市構成、国土的都市構成に関する研究

現在の都市化社会は、一都市だけの問題に終らない。

日本は巨大な都市国家とさえいえる。その視点からの広域的な計画、国土のあり方も重要な課題である。

●都市の本質に関する研究

人間がつくった都市は、人類文明の避けて通れない帰結だが、さらに人間にとって都市とは何か、都市は如何にあるべきかという永遠の課題も問われなければならない。

都市計画の研究はあまりにも大きく、人の一生はあまりにも短い、今後とも絶えることなく、新鮮で本質的な課題の研究を続けてゆきたいと念じている。

■ 主要関係論文

- 1) 郊外宅地開発の基本方向 「調査季報」1968. 10
- 2) 再開発行政の進め方 「ジュリスト」1969. 1
- 3) 自治体と都市計画 「別冊経済評論」1970. 秋
- 4) 現代都市と土地問題 「ジュリスト」1971. 4
- 5) 人工土地論 『現代デザイン講座5』1971. 3
- 6) 都市における建築の外部空間「ディテール」1971.10
- 7) 自治的空間の構造化 「SD」1972. 5
- 8) 港北ニュータウンの環境計画「建築雑誌」1972. 6
- 9) 計画行政における市民参加 「都市計画」1972. 9
- 10) 土地利用と地価 「経済セミナー」1972. 9
- 11) 土地利用と市民参加 『土地問題講座4』1972. 9
- 12) 制御と誘導『現代都市政策講座Ⅳ』岩波 1973. 3
- 13) 都市の計画と建設の課題『同講座Ⅶ』岩波 1973. 7
- 14) 都市装置と市民生活 『同講座Ⅷ』岩波 1973. 9
- 15) 横浜市における地域・地区制の総合的活用による市街地環境創造の手法について「建築学会大会」1973. 10
- 16) ごみコミュニティ論 「経済評論」1974. 2
- 17) 自治体における長期計画の条件 『都市づくりの思索』1974. 2
- 18) 現代住宅政策論 「住宅」1974. 2
- 19) 都市づくりと市民参加 「人と国土」1975. 9
- 20) アーバンデザインと自治体 「調査季報」1975. 9
- 21) 都市行政から都市経営へ 「世界」1975. 12
- 22) 都市経営論と自治 「調査季報」1976. 6
- 23) 『都市を計画する』 岩波書店 1977. 4
- 24) 都市像の本質 「都市問題研究」1977. 10
- 25) 横浜の都市建設と首都圏計画の諸問題 「都市計画」1978. 6
- 26) 横浜市における日照行政の理論と実践 「建築学会大会」1978. 9
- 27) 実践的都市計画論 『別冊SD』1978. 11
- 28) 都市計画法の理念と現実 「都市問題」1979. 8
- 29) 都市の活力 「都市問題研究」1980. 1
- 30) 地方の時代と都市デザイン 「世界」1980. 10
- 31) 『宅地開発における開発指導要綱の成立過程とその

基礎的都市環境整備への効果に関する総合的研究』

1980. 10
32) 『環境計画論』 鹿島出版 1980. 10
33) 自治体の政策プランナー 「ジュリスト」1981. 4
34) 金沢シーサイドタウンのアーバンデザイン構想
「都市住宅」1981. 10
35) 土地利用をめぐる諸問題 「環境研究」1981. 11
36) 自治体による宅地開発指導要綱の成立までの国の宅
地開発施策に関する研究 「別冊都市計画」1981. 12
37) 自治体の環境管理計画 「都市問題」1982. 3
38) 街づくりの政治社会学「自動車とその世界」1982. 11
39) 『都市ヨコハマをつくる』 中央公論 1983. 1
40) 「文化行政とまちづくり」
『文化行政とまちづくり』時事通信 1983. 4
41) 地方都市の計画論「土木計画学テキスト」1983. 10
42) まちづくりと産業振興の方向「産業立地」1984. 2
43) 都市における土地の高度利用
「ジュリスト」1984. 3

日本都市計画学会論文奨励賞

「非集計行動モデルの交通需要予測への適用
に関する研究」

太田 勝 敏

原 田 昇

■ 略 歴

太田勝敏

1942年 長野県に生まれる

1960年 県立松本深志高等学校卒業

1965年 東京大学工学部土木工学科卒業

1967年 東京大学工学系大学院修士課程修了

1971年 ハーバード大学大学院博士課程修了

東京大学工学部都市工学科 助手

1972年 ハーバード大学 ph. D. (都市・地域計画)

1978年 東京大学工学部 助教授

原田 昇

1955年 愛知県に生まれる

1973年 名古屋市立向陽高等学校卒業

1977年 名古屋大学工学部建築学科卒業

1979年 東京大学工学系大学院修士課程修了

1983年 同 博士課程修了, 工学博士

1984年 財団法人 計量計画研究所勤務

○はじめに

このたび、論文奨励賞を頂くこととなり、身にあまる
光栄と存じております。この機会に、長年ご指導をいた
だきました新谷洋二先生をはじめ、関連する学会の諸先

